

日本のコミュニティにおける獅子舞伝承の今日的意義

HIRASHIMA, Akemi / 平島, 朱美

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

92

(終了ページ / End Page)

121

(発行年 / Year)

2016-03-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013411>

日本のコミュニティにおける獅子舞 伝承の今日的意義

平島 朱美

はじめに

日本の獅子舞は元々中国から伝えられたと言われるが、今日それは北海道から沖縄まで日本中に分布している。その芸態や目的、伝承のあり方などにはアジア諸社会の獅子舞との共通点とともに日本の独自性も見られる。日本のコミュニティにおける獅子舞の伝承のあり方及び特徴を全体的に把握するために、本論文ではまず中国はじめアジアの諸社会のそれとの比較の視点を視野に入れて検討する。日本の獅子舞については、今日、少子高齢化、過疎化等により地域社会の崩壊、各地の民俗芸能の疲弊が指摘される中(星野2009)でも、「獅子舞王国」といわれる富山県の農村地域の獅子舞伝承をはじめ、東日本大震災で被災した宮城県の漁村における獅子舞の復活を例に取り上げ、コミュニティにとっての獅子舞の伝承の意義、コミュニティの在り方との関係についてフィールドワークを通して明らかにし、獅子舞の今日的意義を考察する。

日本の獅子舞に関しては、柳田国男、本田安治はじめ、古野清人、小島美子、笹原亮二など多くの先行研究がある。また民俗芸能の継承をめぐるでは、東京国立文化財研究所芸能部より地域の教育力と民俗芸能に関する報告などが見られる。笹原はまた獅子舞の伝承に関して、演者たちの獅子舞の実践の原動力、伝承の目的や動機を「信仰」への依拠としてきた従来

の見解では不十分であり、それ以外の目的や動因を明らかにする必要があると述べている(笹原2003)。獅子舞伝承の活発な富山県においては獅子舞の分類や分布、演技内容などの研究は盛んであるが、コミュニティ集落内における伝承の社会変化及び人々の意識について実証的に研究したものは未だ見あたらない。また東日本大震災被災地における民俗芸能の復興に関しては、文化財に関する被災状況や、体験談がまとめられているが、獅子舞に特化しそれがコミュニティの再建とどのような関係があるのかについて議論する調査研究は本時点で見られない。

本論文では、アジアと日本の獅子舞に関する先行研究、各種博物館及び東京文化財研究所と調査地で収集した調査報告を整理し、アジアの中での日本の獅子舞の特徴を浮き彫りにしたうえで、平常時に行われている獅子舞の事例として富山県高岡市石塚、非常時の事例として宮城県石巻市小湊浜の現地調査を行い、そこで得られたデータを結び付けて、日本の農村・漁村コミュニティにおける獅子舞伝承の現状と意義を検討する。

第1章においては、獅子のシンボル及び中国を中心としたアジア諸社会における獅子舞と日本の獅子舞の性格・伝承の在り方の比較と、日本の獅子舞の由来、芸態、分類、分布、伝承などの現状について述べ、第2章においては、富山県高岡市福田地区石塚における獅子舞の現状及び伝承の実態について住民の考えを中心に整理した上で、獅子舞伝承の意義について考察し、第3章においては、東日本大震災後の宮城県石巻市小湊浜の獅子舞の復興を取り上げ、獅子舞の担い手や住民の復活への取り組みを通して被災地コミュニティにとっての獅子舞伝承の意義について考察する。

第1章 アジア諸社会の獅子舞と日本の獅子舞

第1節 アジア諸社会の獅子舞

1-1-1 獅子のシンボル

「獅子」は「ライオン」に意味と語源を発する。西アジアにおいて勇者の象徴であるライオンが、東アジアでは仏教を背景として広まり、仏を守る聖獣となり、獅子と名乗る。インドでライオンを表すサンスクリット「シンハ」が、西方の「スフィンクス(獅子身の霊獣)」の元にもなり、また漢字の猊(げい)、日本語のシシ(獅子)に転化したと言われる。西アジア古代王国におけるライオンの存在意味は勇者・権力のシンボル、王城や門を守護する番神、生命再生・豊饒のシンボルと捉える。メソポタミアの遊牧地帯でヒツジを狙って出没したライオンを倒す勇者を「ライオンの心をもつ者」と名付けた古代人は、ライオンに対して恐れと憧れを抱くと同時に、大地に豊饒をもたらす聖獣と考えたという。アジアの農村地帯で獅子舞が収穫への期待や感謝の意味で行われていることはこの意味と結びつく。ライオンは大地の生産力を表し、それを支配するものは大地を支配する王となるといわれた。(荒俣2000)

1-1-2 アジア諸社会における獅子舞の性格

東アジアでは国によって、獅子舞が新年や豊作などの祝い時に舞われる場合と、葬式など死者に対して舞われる場合との両方が見られる。獅子舞とは「獅子頭を被って行う芸能」であり、東南アジアから中国と日本にかけて存在している。日本では獅子頭には、鹿や猪、熊など実在の動物を真似たものもあるが、ほとんどが人間の空想によってつくられた想像上のものである。「獅子には動物のもつ飛翔力、躍動感が付与され」ており、その獅子頭は「音楽を伴ったりズミカルな舞や踊りにより、超自然的な世界ま

たは存在と接触することのできる仮面と考えられてきた」(神田 2010 : 318)。そしてその芸能は、元々は邪霊や悪疫を祓う神聖な儀式にあったと思われる。

中国の獅子舞については次の文がその特徴を明確に説明している。

「中国の獅子舞は二人立ちで、獅子頭からたれた胴幕の中に二人入って踊る。動物の動きをリアルに演じ、雑技団(中国サーカス)の一部として発展してきた北獅(北方系)と武術の足技の鍛錬の一環として始まった南獅(南方系)の二つに大きく分けることができる。(中略)見せ場は大人の身長ほどの高さのある鉄柱の上や腰かけを積み上げて作った台の上をジャンプしながら渡り歩く妙技で、新年の行事や春節祭、あるいは地元の祭りに出演して彩りを添えたり、建国記念日である国慶節や双十節に中華街の店々をめぐって門付けをする。」(曾1999 : 762)

現在、獅子舞は、記録されなかったチベット自治区を除きほぼ中国全土に分布しており、主に漢民族の民間芸能であるという。そして獅子舞に霊獣舞としての性格が見られるものの、信仰や祭祀の目的で行う事例は極めて少なく、演じられる場も寺など宗教施設、集落の家々で行われることは稀で、企業の開設祝いや地域のイベントの場であり、舞い手は多くの日本のそれのように地域自治体構成員ではなく、ほとんどそれで生計を立てるプロのグループである(彭2007)。彭はまた、日本の獅子舞は魔除けや豊作、長寿祈願などの信仰的な役割を果たしているのに比べ、中国における獅子舞は宗教性が薄く、むしろ濃厚な娯楽性が見られると述べる。

韓国では獅子舞が仮面劇に登場する。韓国の代表的な仮面劇である鳳山仮面劇の中で獅子が活躍し、墮落僧を懲らしめるために白獅子が仏により

つかわされたり、獅子と虎とが格闘乱舞したりするなど、演劇的な要素が色濃く出ているのが特色であるとされる。鳳山仮面舞は1967年に重要無形文化財に指定され、5名が芸能保有者に指定され若い世代に伝授しているという。また、葬式時の厄払いや病人の居る村での悪鬼退散のために獅子舞が行われたことがあるなど、仮面劇の獅子舞はほとんど災いを祓う性格を帯びていると指摘されている(田耕旭 2004:218-220)。

インドネシアのバリ島には獅子パロンが存在する。絢爛たる仮面仮装をもつ民俗芸術であり、バリ島の人々のもっとも重要な信仰の対象である。現在のパロンはヒンドゥー・バリ(ヒンドゥー教と仏教と土着のアニミズムとが混交したバリ島独自の宗教)の信仰体系の中で、すべての災厄を祓う善の象徴として重要な文化的機能を担っているという。パロンは観光用・観賞用の芸能としても活用されているが、普段は村の守り神として飾られ感謝を捧げられている(河合1995:67-70)。

日本では悪霊を祓い場を清めるための獅子舞と、神への生贄にする鹿や猪の代わりになって踊る獅子舞が各地に存在する。

このように、アジア諸国で見られる獅子頭の仮面を被って舞う獅子舞は、

- ① 超自然的な世界と接触しながら悪魔祓いをし、人々や場を清める
- ② 地域や子孫の安全や、豊かな生産など繁栄を願う
- ③ 死者の供養、鎮魂をする

ための種々の仮面舞踊である、と要約することが出来る。

1-1-3 アジア諸社会の獅子舞の伝承

まず中国本土で展開されている獅子舞については、すでに述べたように信仰や祭祀の目的は少なく、演じられる場は寺など宗教施設、集落の家々ではなく企業の開設祝いや地域のイベントの場であり、舞い手は多くの日本のそれのように地域自治体構成員ではなく、ほとんどそれで生計を立て

るプロのグループであるなどのことから、伝承も村落内の年配者から年少者にはなく、専門舞踊集団の年配の経験者から若い新人に、すなわち師匠から弟子に対して獅子舞の技や楽器などが伝承されている(彭2007)。

日本を含める海外の華僑コミュニティにおける獅子舞の伝承について見る。日本には横浜、神戸、長崎などの中華街がある。横浜では春節の折に獅子舞や龍舞が演じられる。日本での華僑コミュニティにおける中国獅子舞伝承については、異文化社会の中での伝承という特殊性をもつ。華僑コミュニティにおいて、エスニックアイデンティティを存続させるための手段としての獅子舞の伝承形態が研究されている(張2008)。中国獅子舞は常に中国文化のシンボルとして存在し、チャイナタウンの華僑学校がその継承者を育成してきたようである。ベトナムのホーチミン市においては、中国系ベトナム人の龍獅団というグループにより旧正月の獅子舞が演じられているのを見た。龍獅団は一世から二世へと技が伝えられながら、30年以上本市で興行しているという。色や形は基本的に日本の中華街で見るものと同様である。

バリで展開されている儀式的なパロンは日本の産土神社祭礼の獅子舞のように土着的で、村の若者組が集まってパロンを被って村を清めて歩いたり練り歩いたりする様子が南バリで多く見られるという(河合1995: 67-70)。村内で儀式として実施されているパロンは、村落コミュニティ内の年長者から若者に対して伝承されているものと思われる。

韓国の獅子舞は仮面劇の中で演じられるものを中心であるが、伝承の形としては先述したように劇団内の芸能保有者から若い世代に伝授している形が基本となり、大学の仮面舞や劇のクラブ内でも伝承されてきているということである(李杜鉉 1981)。

またアジアには世界規模の獅子舞大会がいくつかある。張は獅子舞世界大会の意義を、「他国の華僑・華人との交流を通して、在日華僑は世界の

華僑との違いとともに共通性や文化的絆をも確認しているのである」と述べている(張2008: 82-83)。

第2節 日本の獅子舞

1-2-1 獅子舞の分布と多様性

まず、日本の獅子舞の由来について簡単に述べる。「獅子」は日本に生息しないライオンを原型として、当初中国から唐獅子という半ば空想上の動物として日本に伝わったものだが、獅子舞は、今や宗教や儀式、民俗や芸能に広く深く取り込まれ、ハレの場面と密接な関わりをもってきている。神事に登場する獅子舞は、612年に百済の味摩之(氏)が伎楽を伝え、その演目に師(獅)子が登場したことが記録されており、仏教文化と共に大陸からもたらされた伎楽の師子(獅子)に端を発しているとされる(本田1990: 146)。現存する日本の獅子舞は、仏教文化の一部として現在でも寺社や舞台等で舞われているものと、民間に伝来するにつれ土着信仰と融合し仏教文化とはやや異なる形で発展しながら集落で祭り等の中で展開されているものとの二系統が見られる。

次に、獅子舞の分布について、文化庁により選ばれた国指定・選択文化財の獅子舞と文化庁での無形民俗文化財の調査結果のデータに基づき整理してみる。

文化庁での無形民俗文化財の調査(1976実施)では、日本全国で980件の主要な民俗芸能・祭礼のうち「獅子舞」の分類に入るものが86件紹介されている。それを1件につき一つの●で、県別の白地図に表してみた(図1)。それに文化庁により重要無形民俗文化財として「国指定」や「記録選択」(1-2-2の項参照)されているもの(文化庁文化財部伝統文化係2012)を◎で加えて表した。しかし、この地図上に表されていない獅子舞が多く存在することを述べておきたい。箱根の湯立獅子舞は昭和49年にはすでに「記録選

扱」されているのだが、ここでの紹介・掲載はない。愛媛の清水の五つ鹿踊りや八つ鹿踊りは「獅子舞」ではなく「踊り」のジャンルに区別されており、熊本の小国のお座敷田植では獅子舞が中心になっているのだが分類先は「田楽」である。他にも、例えば「村のあるところ獅子舞あり」「現行のものは(中略)・・・およそ一、三〇〇くらいと推定される」(富山県教育委員会編集『富山県の獅子舞』1979)とする富山県には一つも分布の印がない。隣の石川県も分布図上では印がついていないが多くの獅子舞が存在すると聞く。このような例は他の自治体にもみられると推測される。いずれにしても獅子舞がごく限られた地域のものではなく、全国津々浦々に展開されたものであることは見て取れる。無形民俗文化財に指摘されることがなくても各コミュニティでは獅子舞が伝承されているのである。

(図1) 日本における獅子舞の分布



上記の図は文化庁監修/日本ナショナルトラスト編(1976)、文化庁文化財部伝統文化課(2012)に基づいて筆者が作成したもの

獅子舞の種類は大きく2つに分けることができる。一人の演者が獅子頭を被って一匹の獅子を演じる一人立ちの獅子舞で「風流(ふりゅう)系獅子舞」と、太神楽などの頭と尾に一人ずつ二人以上の演者で一頭の獅子を演じる二人立ちの獅子舞の「伎楽(神楽)系獅子舞」である。分布が大きく異なり、概ね風流系獅子舞は主に関東以北・東日本に分布し日本固有のものであるとされ、伎楽系獅子舞は、主に中部・北陸以西・以南において見られ、大陸伝来のものであるとされる。また当該調査報告において言及されていない富山県の西部や石川県能登地方はほとんどが百足獅子であり、筆者が現地調査を行った富山県高岡市福田地区の獅子舞もこの類である。

1-2-2 獅子舞の伝承

獅子舞は、基本的には神社の祭礼の中で奉納される芸能であるという性質をもち、農山漁村部や都市部のコミュニティで神社の祭礼を通じて粛々と伝承されている。その中には文化財保護法により、民俗文化財として文化庁や地方自治体に指定されることによって保存会等により保持されているものと、そうでないものがあり、その数は後者の方が圧倒的に多い。獅子舞を構成する要素である獅子頭や獅子舞用具などは有形民俗文化財に、舞踊や囃子は無形民俗文化財に区分される。これ以外「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財(通称「選択無形民俗文化財」)」もある。コミュニティに見られる獅子舞の伝承について、宮家準は日本人の宗教観と祭りの思想、民俗芸能等について、伝承する人々の側に立って様々な考察をしている。日本人にとっては山・海・川など様々な自然の中に崇める対象である神が存在し、農耕を守る水分神に祖先の靈魂が加わって氏神が成立する。農耕の守護神としての氏神を祭るのが春祭と秋祭であり、獅子舞の村内巡行は氏子の家々に神の力を授ける営みである。(宮家2002: 64-66)。日本人には、生きていく中で気枯れするような困難に出会ったとし

ても、祭りや獅子舞を行いながら、祈り、願い、乗り越えていこうとする姿が多くみられるのである。

まとめ

アジアの、獅子頭の仮面を被って舞う獅子舞の、ほぼ共通する目的は、超自然的な世界と接触しながら悪魔祓いをして人々や場を清め、地域や子孫の安全や繁栄・豊かな生産を願い、死者への供養のために祈る種々の仮面舞踊である、と要約することが出来る。ただし中国の獅子舞に関しては、死者への供養、鎮魂の目的をもつものは見受けられない。獅子舞が舞われる場や時期に関しては、新年や祭り時に行われることは概ね共通しているが、相違点もある。中国では開店祝いや大きなイベント時など祝い事のある場合に行われ、韓国やラオス、バリ、日本などでは葬儀時に災厄祓いとしても獅子舞が行われる。日本では豊作・大漁祈願の春祭りや収穫感謝の秋祭りなど農業や漁業など生業のリズムに合わせて行われる場合が多い。獅子舞の伝承の形としては中国の獅子団やアジア各国の華僑コミュニティ、韓国の鳳山仮面劇などでは技能集団の師匠から弟子へと伝承していく形であり、日本やバリのコミュニティでは村落内で年配者から若者へと伝承していく形となっている。

一方、日本全国の獅子舞の分布状況を白地図に表すことにより、日本の獅子舞には地図上に表されている文化財として指定されているものと、富山県のように指定されず地図に表されていないが県内多くの村落に存在するものがあるということが明らかになった。すなわち日本の場合、ほとんどの獅子舞は専門技能集団ではなく、地域住民が農山漁村及び都市部でも伝統を引き継ぎ維持しているコミュニティの中で直接実施する民俗芸能として獅子方若連中や青年団などコミュニティ内部の社会集団によって担われ伝承されている。

第2章 富山県高岡市^{ふくた}福田地区における獅子舞の伝承

富山県は伊勢神楽系の二人立ち獅子と百足獅子の二種類が見られる獅子舞の盛んな県で「獅子舞王国」ともいわれ、総数が1200近くあるといわれる(高岡市博物館 2008: 50)。富山県教育委員会は『富山県の獅子舞』(1979)を刊行し、県全体の獅子舞の様子を概観し、主な地域の獅子舞について芸態を中心にまとめている。佐伯安一は『富山民俗の位相』を表し、富山の獅子舞について県内に存在する獅子舞の類型や分布・流入経路、音曲等について総合的に論じている(佐伯2002: 242-320)。さらに『富山県の獅子舞芸能と祭礼－獅子の芸能と行事の現状－』(2008)が富山県の「獅子舞活性化マスタープラン研究委員会」より刊行されており、これが富山県の獅子舞についての最新のものである。筆者は、それらの内容を踏まえつつ、そこでは言及されていないコミュニティにおける伝承の現状、すなわち住民が獅子舞に取り組む動機や背景、伝承の社会変化などを中心に、2013年、2014年に継続的に富山県高岡市福田地区において見学、聞き取り調査を行った。本章では、福田地区石塚自治会の獅子舞の具体的事例を中心に、獅子舞伝承の今日的意義について考察を行う。

第1節 富山県高岡市の獅子舞

富山県は全体的に伎楽(神楽)系の獅子舞を展開している。この中に獅子頭1人に胴幕内1人計2人で演ずる「二人立ち獅子」の系統と、獅子頭1人で胴幕内に多数の「百足獅子」の系統の2つが存在する。高岡市は基本的に百足獅子を展開している。伎楽系獅子舞を発展させている地域においては獅子舞がほとんど当該地域の信仰儀礼との関わりをもっている。伎楽の芸態は減びたが、獅子は清浄を重んずる日本人の祓いの思想に適応したためか、後々まで伝えられ、かつ日本化して様々の形に発展してき

たという。

富山県の獅子舞類型(富山県教育委員会文化財課2006)

芸能の獅子舞	二人立ち獅子	金蔵獅子
		下新川獅子
	むかで 百足獅子	氷見獅子
		砺波獅子
射水獅子		
行道の獅子舞	行道獅子	

富山県で黒部市より東部の地域と神通川流域の富山市南部の地域が二人立ち獅子を展開する。この形は芸態と分布域によって2通りの型に分けられる。県西部の高岡市、氷見市、砺波市などの地域は百足獅子を展開し、これも同様に3通りに分けられる。行道獅子は、芸能の獅子舞とは別に祭り・行事において、神輿や曳山の露払い、先導役として登場する舞わない獅子の形態である。高岡市内には、富山県無形民俗文化財指定の二上射水神社築山の神輿渡御に先導する「げんだい獅子」と併せて、高岡市無形民俗文化財指定の「気多神社のにらみ獅子」がある。この両神社は二上山の南側と北東側に位置し、共に歴史ある延喜式内社であり、春期祭礼では、春を迎え作物の豊作と平穏を祈願して神輿渡御が行われ、その際行道形式の獅子が露払いとして先導する(二上山総合調査研究会2007)。市内には各地域の氏神を祀る神社の周辺に、芸能としての獅子舞が数々存在する。高岡市は県西にあり、ほとんどが氷見獅子を中心に行っているが、砺波、射水獅子も混在している。氷見獅子は天狗面をつけた獅子あやしと共に舞われるが、実際には例えばテングを面なしで、または子供が演ずるなど、各地域によって実情に合わせて変えながら伝承されてきている。

第2節 高岡市福田地区・石塚の事例

2-2-1 福田地区の概況と獅子舞の現況

高岡市は人口約17万7千人、6万4千世帯、うち福田地区は人口約2800人、900世帯、内215世帯が農家、他が非農家である（平成23年度版高岡市統計書）。福田地区内に神社は8社、年中行事は種々あるが、9、10月の秋祭りの際に獅子舞が実施される。10自治会のうち獅子舞が行われているのは氏神が祀られる7自治会であり、1自治会だけは砺波型、あと6自治会は全て氷見型である。

2-2-2 秋祭りに見られる獅子舞——石塚の事例

石塚の獅子舞の担い手

現在の石塚には42世帯、およそ135人が住んでいる。22世帯が農家だが、ほとんどが兼業であり、転入者はみな農業に従事していない。

獅子舞は青年団、獅子方若連中が中心になって進めている。青年団は石塚出身または在所者で、中学3年から30才（35才という人もいる）までの男子となっており、平成25年度は12人いる。獅子方若連中とはその青年団と55才くらいまでのOBで成り立っている組織である。そして56才以上の人たちも手伝ったり応援したりしている。

石塚の獅子舞の構成と演目

（一）構成について

大きく獅子方と囃し方の二つによって構成されている。

（1）獅子方…獅子（百足獅子→獅子頭1名、胴体4名）、天狗（1～2名）

獅子は青年団のメンバーが、天狗は小学校3年生から中学2年生までが演じる。天狗は普通、面をつけるが、石塚は面をつけずに演じる場合が多いので、棒とり・棒とも呼ばれる。

(2) 囃子方(楽器伴奏)・・・大太鼓1名、篠笛5、6名

太鼓は青年団OBか、獅子方が合間に演ずる。通常3～4名で順番に受け持つ。

(二) 舞の演目、内容について

一つ一つの演目の名称と動きについてはわかっているものの、各々の意味については、わからないものもあるという。舞う演目はその場でのご祝儀などを加味した団長の判断によって最終的に決定され、お囃子(主に大太鼓)の先導によって獅子方に周知される。太鼓のリズムを聴いて演目を判断、舞い始める。演目に合わせて、大太鼓と篠笛から成り立つお囃子の曲目も変わる。

祭り当日の進行と内容(2013年度の場合)

① 石塚神明宮における神事・獅子舞始め 11:00～

各家から戸主が参加する。神前には豊作を感謝し供物として米、野菜(大根)、鯛など山海の珍味と清酒、若水が供えられる。米は各家から1合ずつ持ち寄られたものが供えられている。

開始時の午前11時近くになると、地域住民が神社に続々と集まり始める。獅子がお囃子に合わせ天狗に導かれて鳥居より入場する。そして獅子だけが本殿の中に入り込み、神官により魂が入れられる。お祓いをして御幣をつけることにより



神が降臨して生き返り、邪気を祓う力を身に付けると信じられている。その後境内にて初めての獅子舞の奉納が行われる。

本殿内部においては、この後、神職と各家の戸主が参加して、お下がりの御酒や供物をいただきながらの直会(なおりい)が行われる。神社への

参集者には供物のお下がりとして一人一人に梨が配られ、お開きとなる。

② 近隣自治会同士の獅子舞の共演 13:00~

近所のスーパーマーケットの敷地で石塚と上北島2自治会の獅子舞共演会が行われる。これは普段交流する機会のない2つの獅子舞を同じ場所で披露しあおうという住民の願いで昨年より実現した催しである。上北島の獅子舞は元々石塚より伝えられたものだということや、祭りが同じ日であるということから、兄弟獅子の共演として実現したものである。同じ曲なので舞いの内容はほとんど同じだが、踊り方が微妙に違う。観客からは所々でどよめきや拍手が起こる。

③ 獅子舞の各戸訪問 14:00~

その後、獅子方若連中とお囃子隊は1軒ずつ家々を周り御祓い、お清めをしていく。

各家々では、前日までに掃き清められた玄関に、早朝より祭り用の幕飾りが付けられ、祭りを祝い、獅子を迎える用意が調う。当日は親類や友人が集まってくるので、お祝いの赤飯を炊いて昼食や夕食に備える。獅子舞にかかる時間は各家庭の事情に依るが、移動時間も入れ平均して15分前後である。M家は本年長男と長女が結婚するという祝い事があったので1時間かけて特別な獅子舞が演じられ、地域の住民みんなが集まり祝われる特別な演出がなされた。

④ 獅子殺し 25:00~

毎年深夜12時過ぎに、祭りの締めである「獅子殺し」が石塚公民館前で行われる。約1時間かけられる。初めは普通に始まる天狗と獅子との掛け合いであるが、天狗は獅子との戦いに疲れ、何度も地面に転がって立てなくなる。その度に獅子あやしの子供たちが駆け寄り、励まし立ち上がらせる。途中で天狗だけでなく、面をつけた道化も加わり獅子と戦う。獅子は何度も顔を上げて立ち向かおうとするが徐々に弱り始め、やがて天狗たち

の剣が体に突き刺さって動かなくなる。

これらの演技の間に、青年団や子供たちから参観者に対して缶ジュースやお菓子、果物などが持ちきれないほど配られる。さすがに遅い時間なので、参観者は最高時ほど多くはないが、参加した人たちは獅子が弱っていく様を見届けたり、道化役が参観者の間に入ってきたりする度に歓声を上げたりして楽しんでいる。

獅子舞の意味合い～なぜ獅子を殺すのか

獅子の主目的は悪魔祓いであるとする一方で、獅子は神さまの使いであり、獅子舞は生産や収穫を願う農民の祈りを叶えるものであると信じられている。邪気を払うことと、豊かな実りを願うこと、その双方の願いが獅子舞に込められているようである。

それではなぜ獅子殺しを行うのか。長く獅子舞を支えてきたO氏(男性、70歳代)は、最後に獅子を殺すのは、獅子を殺しておかないと悪さをするので、暴れるのを防ぐために殺すのだと考える。また神社の宮司(男性、40歳代)は、獅子は村中と各家を回って邪気を祓い、悪いものを食べ尽くし腹にいっぱいためる、最後にしっかり殺して悪いものを全部無くしていく、だから殺さなければならないのだと言う。村人の立場と神職の立場で言い方は違うが、両者とも獅子殺しを通して邪気を祓い、神に感謝するという意味は同様である。

2-2-3 獅子舞伝承のあり方とコミュニティにとっての意義

石塚の獅子舞の由来と伝承への取り組み

石塚の獅子舞は明治24年に横田地区の北島(下北島)より伝えられた旨、獅子舞衣装箱の長持ち蓋裏に墨書されている。獅子舞の伝播の時期として幕末期と明治20～30年代にかけての2期に大きな隆盛期があったとの県報

告内容と合致する。

老人会長のO氏に今日までの主な記憶を話してもらった。同氏が団長になったころ、日本は高度経済成長期に入り、多くの若者が大学や就職先の少ない富山県を離れ、進学や就職のために都会に出ていった。続けるのが苦痛で「辞めようと思えば辞めるのは簡単だった」が、「(ここで)生まれた以上、ここでやっていかなければならない」と思った。獅子舞を続けていくことが村の存続にとって大事であると考えたという。

さまざまな変化や変更は、今の3,40代の小さい子供を育てている親の世代(O氏の息子の世代)から見られるようになってきた、とO氏は言う。子供をどんどん参画させるようになって親も参加するようになった。逆に、親の参加で子どもも参加し始めるという姿もあったようだ。女子の参加が始まったのもその頃である。

同じ頃(2008~2010年頃)、県外で働いていた団塊の世代の人々が退職で次々に村に帰ってきた。彼らが獅子舞は「見て楽しい」「参加して楽しい」と思い、地域が生き生きと活発になるよう自分の力を役立てようと考えて応援を始めた。これが意欲的な若い世代の考え方と共鳴して「部落の一体感」を生み出しているという。O氏は「現在、大きな垣根を乗り越えた」と感じていると言う。

舞と囃子、道具類の伝承

(一) 内容の変化

獅子舞の演目は基本的に変わらないが、全体として時間を短縮し体力を使わないものに変ってきている。賑やかでテンポがよく、時間が短く済む演目が人気が高いという。

(二) 演じ手の変化

元々は、石塚生まれの家の長男だけが獅子舞に参加する資格を有してい

た。獅子頭、棒とり、お囃子もずっと同じ役、と決まっていたが、子供数の減少、転入者の増加といった社会の変化の中で、当初の決まりが変わっていった。資格の制限がゆるくなるにつれて関心を持つ人も増えて行った。笛の演奏も女子が参加するようになり、現在は母親も演奏に加わるようになった。六、七十歳代の年配者も孫の応援を兼ねて練習を見に行ったり、手薄な太鼓の手伝いをしたりする姿も見受けられた。家族の三世代が何らかの形で参加・関与するようになってきている。

(三) 道具類の維持・保管(略)

まとめ

本章では富山県高岡市の獅子舞の特徴、2013年秋祭りにおける石塚での獅子舞の伝承の様子などを述べた。当該地域における獅子舞の意義は次の3点にまとめられる。

第1に、人々にとって獅子舞は信仰的な意味合いをもって毎年行われているものである。福田地区の人々の獅子舞の解釈についてまとめると、獅子は(1)豊かな実りをもたらす(もたらした)神の使いで農民の願いを叶える存在、(2)悪魔を払う霊力を持ち、場や人々を清める存在、(3)最後に村中の邪気を抱えた悪霊として退治される存在、の3点となる。(3)に関連して獅子舞の最後に獅子殺しが演じられるが、これは中国はじめアジアの獅子舞では見られず、日本の中でも珍しいものである。獅子舞はコミュニティの構成員に、豊作への感謝とともに、邪気を払われ清められた安心感と、新しい一年への希望をもたらすものであると考えられる。

第2に、獅子舞はコミュニティの社会組織や家族ごとの連帯感を形成しているものである。秋祭りは自治会役員の中の宮総代と青年団が中心となって運営・進行する。若者たちにとっては、共に活動することにより地域の仲間との連帯感を一層強めるものとなっている。また各家庭でも、獅

子舞を通して孫、親、祖父母の三世代間の交流が深められている。

第3に、獅子舞は地域の活性化にとって大切な役割を果たしているといえる。若い世代は異口同音に獅子舞が「楽しい」「みんなと一緒に」にやるのがいいと述べ、50代以上の年配者は、獅子舞は「地域を活発にする、している」ものだと位置づける。言い換えれば、一人一人がコミュニティへの所属感を持ち、その中で自分が生きている、生かされている、自己のアイデンティティが確立されている状態と言える。これには、三世代間で相互に関わり合う家族の力を縦糸とするならば、地域自治会内の各組織の働きが横糸となって、地域における活発な獅子舞の活動が形作られているのだと言える。

第3章 東日本大震災地における獅子舞の復活 ——宮城県石巻市小湊浜の事例を中心に

本章ではコミュニティそのものが大震災によって壊滅的打撃を受けた宮城県石巻市小湊浜の獅子舞の復活の事例を取り上げ、獅子舞の存続がコミュニティにとってどのような意味を持っているのかについて検討する。被災地における民俗芸能の復興に関しては、東京文化財研究所無形文化遺産部より2012年と2013年に調査報告書が刊行されている。そこでは獅子舞を含めた民俗芸能復活の事例も報告されているが、獅子舞とコミュニティの復活を結び付け特化したものは見当たらない。

小湊浜の場合、2011年7月には集落の神社の祭礼を、翌年1月には獅子舞の復活を果たしている。筆者は2013年7月に地元の神社の祭礼に参加し、2014年5月には金華山黄金山神社の祭礼で披露された小湊浜の獅子舞の見学を通して調査を進めた。本章では被災地での現地調査、前報告書およびメディアの資料分析を併せつつ、なぜその地域の住民たちはいち早く神社

の祭りと獅子舞の復活に熱意を持ち力を注いだのか、どのように獅子舞の復活を実現したのかを考察し、災害という非日常の事態が起こったときに、獅子舞の復活の意義と獅子舞の伝承の社会的機能について検討を行い、獅子舞の伝承の今日的意義を追求する。

第1節 小湊浜地域の概要と被災状況

宮城県東部、三陸海岸に位置する牡鹿半島^{おしか}は、県内では比較的温暖な気候で、リアス式海岸が広がる豊かな自然と豊かな海の幸が特徴の水産と観光の街である。金華山沖は黒潮と親潮がぶつかるので世界でも有数な漁場となっている。カキ、ホタテなど養殖も盛んである。2011年3月11日の東日本大震災は、この牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源とし、牡鹿半島、沖合にある金華山は、震源から最も近い陸地である。地震と巨大津波により多くの尊い命を奪われ、全壊・半壊など損傷を受けた建物は全体の7割近くにのぼり、牡鹿半島の海沿いの各地区は今ではほとんどが更地になっている(木村 2013)。

石巻市小湊浜はこの牡鹿半島に位置する漁村である。世帯数152(159)戸、人口471(573)人である。()内は2011年2月末、震災直前の統計によるものである(石巻市総務部総務課「行政区別人口調査票」(2013年4月末現在)による)。石巻市牡鹿総合支所調査によると、小湊浜全体で全壊が124件、大規模損壊が7件、半壊が11件、一部損壊が18件、亡くなった方が15名、行方不明が3名であった。地震発生時、小湊浜の高台に位置する氏神の五十鈴神社は社殿の間近まで水が襲い少し傾いたが、社屋への津波の被害は受けなかった。しかし神輿は半壊、獅子頭は海に流され見つからなかった。

第2節 小渕浜の獅子舞の復活

3-2-1 小渕浜の獅子舞とその担い手

小渕浜の獅子舞は、新年を祝い邪気を祓い清めるという目的で、毎年1月3日に舞われる。各戸を回って家毎に御祓い、お清めをして回るのが習わしである。まず団長宅で実業団総会が行われ、そのあと神官によって獅子の魂入れの儀式が行われ、初めの舞がなされる。その後小渕行政区の区長の家を回り、後、一件ずつ回っていく。夜になり、最後は神社で獅子舞を奉納する。

小渕浜の獅子の形は、黒の獅子頭を用いての一匹獅子である。頭に1人、しっぽに1人、体に2, 3人入り、最低4人以上必要とされる。獅子頭は重く上に動きも激しく大変なので、順番に演じる。楽器は太鼓、小太鼓、横笛(六穴)を使う。

舞いの内容には「内舞(うちまい)」と「虎舞(とらまい)」の2種類がある。まず内舞を舞う。ゆっくりとした舞で、獅子頭が部屋の四隅を順に睨み邪気を祓い清めていく。次に虎舞を舞う。激しい踊りで悪霊を退散させる勇壮な舞である。踊りの途中で、獅子の頭の下から幕中に祝い金が渡されると、獅子頭はその人の頭を噛んで御祓いをしてくれる。

舞手は「実業団」が務める。実業団は、高校卒業の年から45才までの基本的に各家の長男で成り立っている。最近では、人数が減っていることもあり、希望者は長男以外でもよいことになっている。2013年の人数は17人である。何度も獅子頭を経験している実業団団長のG氏(男性、40歳代)によると、舞いの最中で次のようなことがあるようである。「獅子舞の時はビールだの酒をどんどん飲む。飲んで舞う。激しく舞うから眠くならない。飲んでトランス状態になる。それで激しい舞ができる」という。トランス状態になるとは、その時点で神が乗り移った状態とも考えられ、獅子が霊力をもって浜の人々の邪気を払い、無病息災、家内安全などの願いを受

け入れ叶える姿であると信じられている。

3-2-2 獅子頭の再生と獅子舞の復活

獅子舞の復活は津波により海に流された獅子頭を探す作業から始まった。2011年6月にダイバーたちに何度も海の底を見てもらったが、瓦礫も多く発見することはできなかった。今後どうするかの話し合いを経て、獅子頭を作り直そうということになった。必要な資金については、いくつかの財団が受けてくれたため、獅子頭を造ることができる運びとなった。支援ボランティアで参加していた牡鹿中の美術の先生が作成を引き受けてくれ、写真を見たり、住人の記憶に基づいた意見をいろいろ聞いたりしながらスケッチし、神聖な木とされている桐の木を使って彫り進めていった。2012年1月15日に新しい獅子頭による獅子舞の復活が実現した。初めて獅子舞が舞われたときは、批判していた人も含めて、皆が喜んだという。読売新聞にはそれに関する次のような記事が載った。

自慢の獅子頭がついに戻ってきた。牡鹿半島の小渕浜の仮設住宅の集会所で5日、青年実業団メンバーの後藤晴人さん(45)が箱から獅子頭を取り出すと、住民から驚嘆の声が上がった。

「いいっちゃねえ」

「獅子が若え感じだなあ」

「そりゃ、生まれたばかりだもん」

副区長の大沢隆夫さん(73)も「大したもんだ。小渕の宝だ」と顔を紅潮させた。(中略)獅子頭の装飾を長年担当してきた亀山竹美さん(84)が、しみじみと言う。

「流された獅子が、小渕に降りかかる難をみんな持っていつてくれた。だから姿を見せなかったんだな。」

年の初めにやってきた浜の新しい守り神。15日に地元の仮設住宅を巡り、お披露目する予定だ。（高倉正樹 読売新聞2012年1月11日付）

流された獅子が小湊浜の災いを持っていってくれ、新しく作られた獅子頭は再生した獅子としてコミュニティの守り神とみなされていることが、住民の語りから読み取れる。

さらに、小湊浜の獅子舞はその地区に留まらず、金華山黄金山神社の初巳大祭において神社の依頼により毎年奉納されていた。その祭礼のオープニングを務めるのが小湊浜の実業団の獅子舞であり、再生した姿は三陸の漁村全体に勇気を与えたであろうと思われる。

第3節 獅子舞の復活の意義とコミュニティの再建

小湊浜住民にとっての祭り・獅子舞とは何か

金華山黄金山神社の御末社として位置づけられている本神社の関係行事は旧暦6月15日（西暦の7月）に行われている例祭と新年行事の年2回で、正月には新年の神事と共に獅子舞が村内を回り、最後に神社に奉納されていた。2011年震災後においても五十鈴神社祭礼は行われた。被災した人々は、神輿の壊れている部分を直してトラックの荷台に載せ、瓦礫がうずたかく積まれている中、集落内を練り歩いた。大被害にあった直後に、小湊浜地域の人々はなぜいち早く五十鈴神社の祭りを行おうとしたのか。牡鹿地域全体を束ねている石巻市牡鹿総合支所長K氏と、獅子舞を担う中心的存在である実業団団長G氏に、理由について伺った。

「(獅子舞を復旧させたということは)小湊浜は心一つになるということが根ざしていたということだ。小湊浜の基幹の産業は漁業だ。漁業は共同作業でやる。浜ごとに獅子舞があり、無病息災、海上安全、

大漁祈願をする。震災で家が全壊したり漁具が喪失したりしてもコミュニティは壊れていない。顔の見える地域だ。向いている方向は同じだ。」(K氏)

「震災直後、『まつり、やっか?』と聞いても、『できるわけねえべ。』とみな言っていた。でも、やってくれればうれしいんだよね。祭りやってさわぐのが小湊の伝統だ。祭りも獅子舞も、ここだけのものというプライドがある。震災後ゼロになった。ここからまた始めた。(獅子舞の意義は)震災前も後も同じ。(浜にとって、自分にとって)なくてはならぬ文化なんだ。浜をつないでいきたい。浜を存続させるために祭りや獅子舞がある。」(G氏)

各浜で毎年行われている獅子舞は、無病息災、海上安全、大漁祈願など人々の願いを聞き届ける浜の守り神としての役割を担っており、それは震災に見舞われても失われることの無い地域の文化なのだということが、これらの語りから推察できるのである。

また、小湊浜の漁師とボランティアの人々で作っている「小湊浜通信」の2012年9月1日付に、編集長である東京在住KN氏(50歳代)は五十鈴神社の祭り当日の記事を掲載し、「何百年も繰り返されてきた祭りは、それだけ人々にとって重要な行事で、それが瓦礫だらけになっても行われるということは、まだまだこの集落は続いていくという決意のように感じられた」と感想を述べた。それを裏付けるのが前述したK氏やG氏の言葉であろう。祭りやってさわぐのが小湊の伝統であり、なくてはならぬ文化であり、浜をつなぐものであると言った実業団団長の言葉、何を喪失してもコミュニティは壊れていない、向いている方向は同じなんだと言った牡鹿支所長の言葉にそのことが明確に表されている。コミュニティのメンバーを

つなぐものとして、昔から綿々と受けつがれている祭りや獅子舞は、そのための大きな場になっているのである。獅子舞とは元々は地域の氏神祭礼と関係し、悪魔祓いや様々な福を願う住民にとっての守り神的意味を持つものと信じられ、それは地域にとってなくてはならぬ文化、伝統であり、自らのアイデンティティを構成するものである。それ故に災害という非常時に際しても失われることのない、コミュニティの存続にとって欠かせないものと言えよう。獅子舞の勇壮な踊りはまた、一度壊れてしまった村や傷ついた人々の気持ちを元気づける元となったと思われる。

まとめ

多くの獅子舞は通常、新年や祭りなどのハレの日の祝賀の際に魔除けや招福の目的で行われる。東北地方にはそれとは異なり死者供養、鎮魂のためのものも存在する。墓獅子や鹿の頭をかぶる一人立ちの獅子舞の鹿踊りは、盆に新仏の家の庭や墓地、秋祭りに神社の境内などで、念仏供養や五穀豊穡を感謝して踊る（門屋 2010：316-317）。東京文化財研究所発行の第6回報告書『震災復興と無形文化財－現地からの報告と提言－』（2012）に掲載された阿部武司の報告によると、壊滅的被害を受けた沿岸部に配慮し祭りに対する自粛ムードが広がる中で、初めは内陸部で「供養」がテーマである獅子踊りなどが、瓦礫の中や仮設住宅の多くの人々の前で舞われた。盆を前にして獅子舞が奉納されたり、仲間に犠牲者が出た獅子舞グループも、祭りを通して復興と鎮魂を願ったという。この後に普段はハレの日のみに登場する獅子舞も、上述の獅子に倣って鎮魂・供養の機能を働かせて舞われたものと思われる。

コミュニティが震災による深刻な被害、ダメージを受けたときこそ、その地域毎に伝承されてきた民俗芸能には、地域住民の気持ちを前に向かせる力があると考えられる。困難な中での実施は、コミュニティ再建へのパ

ワーにもつながっている。見る人々の心に響き、地域のコミュニケーション復活の力にもつながっていったと思われる。

本調査では、獅子舞をはじめとする民俗芸能は、元々各地域において平穏な年々の生活の中において粛々と行われ受けつがれてきたものであり大きな存在意義がある故に、未曾有の災害にあって消滅するのではなく、尚更必要とされ、人々の心の中に浸透し、励まし、コミュニティ存続の安心感と希望を持たせることができるのだということを明らかにしてきた。しかし一方で、弱体化したコミュニティにとっては第三者の支援が不可欠であるということも事実である。祭りや民俗芸能への第三者の関与の仕方はどういった形が望ましいのか、どうあるべきなのか、といった検討課題が残る。これは被災地のみならず、日本全体の農漁村地域に当てはまると考えられる。

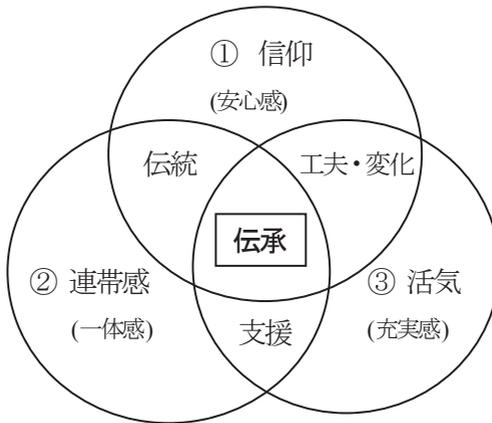
おわりに

アジア諸社会の獅子頭の仮面を被って舞う獅子舞は、(1) 超自然的な世界と接触しながら悪魔祓いをして人々や場を清め、地域や子孫の安全や繁栄・豊かな生産を願う、(2) 死者への供養のために祈る種々の仮面舞踊である、と要約することが出来る。獅子舞が舞われる時期に関しては、新年や祭り時に行われることは概ね共通しているが、相違点もある。中国では開店祝い、旧正月の行事や廟会など祝い事のある場合に(1)の意味のみで行われ、死者への供養、鎮魂の意味をもつものは見受けられない。それに対して、韓国やラオス、バリ、日本などでは葬祭時に災厄払いとしても、すなわち(1)(2)両方の意味で獅子舞が行われる。獅子舞を伝承する担い手としては、中国の獅子団やアジア各国の華僑コミュニティ、韓国の鳳山仮面劇などでは獅子舞技能集団の師匠から弟子へと伝承していく形であ

り、日本では、コミュニティの中で伝承していく形が多い。日本のほとんどの獅子舞は専門芸能集団ではなく、農山漁村のコミュニティ内部の住民によって担われる村の民俗芸能の一つであると位置づけることができる。

富山県高岡市福田地区における獅子舞の場合と、2011年の大震災に見舞われた宮城県石巻市小湊浜の場合、両調査地とも住民にとって獅子舞は安全、繁栄、豊作・大漁祈願や感謝などの気持ちを込めて舞うという目的をもち、同時に、獅子舞の伝承は、それによって固められる地域の一体感、コミュニティへの活気をもたらすために大きな役割を果たしていることがわかった。調査地の事例をもとにして、獅子舞伝承の意義について図2のようにまとめてみた。

(図2) 獅子舞の伝承のあり方と意義 (筆者作成)



石塚の場合は、①秋祭りに豊作感謝、邪気払い、家内安全・繁栄など様々な願いを持って獅子舞が行われ、②獅子方若連中や青年団を中心に各家族やコミュニティの構成員(祖父など獅子方OBや母親、幼児等々)の支援や参加も含めて練習段階から力を合わせて取り組み、③長男に限られて

いた担い手も、長男のみでなく、また女子の参加を図るなど、獅子舞のきまりごとを変えたり、集落間の獅子舞共演などを実施したりした。同時にこの時期退職して石塚に帰って来たUターン組が、獅子方若連中に刺激を与え応援し励まし、石塚の活性化にとって大きな働きをした。

小湊浜の場合は、①家屋や神社の損壊、獅子頭の流失などの打撃を受ける中でも祭りや獅子舞を復活させた。そこから②コミュニティが深刻なダメージを受けたときこそ、その地域毎に伝承されてきた獅子舞は、人々の気持ちを前向きにさせる力があることがわかる。さらに③流失した獅子舞が復活できたのは住民の強い思いと共に、ボランティアが獅子頭の搜索や制作に協力したことが大きな要因となり、彼らの支えや励ましは、コミュニティの構成員を元気づけたのである。

「獅子舞を続けていくことが村の存続にとって大事」(石塚)「浜を存続させるために獅子舞がある」(小湊浜)など、異口同音に語られたこれらの言葉には、平常時でも非常時でも変らない獅子舞の意義が明確に示されているのである。すなわち獅子舞は地域住民にとって平常時に邪気払い、家内安全などをもたらすのみならず、非常時にも死者供養・鎮魂を含めて村落の再生を願う信仰の拠り所としての意味合いをもつ。それと同時に、コミュニティの構成員の連帯感・一体感を強化し、コミュニティの存続を願う人々のアイデンティティの拠りどころになるなど、社会的意味合いにおいても必要な役割を果たしていると思われる。このように、本研究では獅子舞伝承の原動力を、信仰に依拠するだけでなく、上述したような社会的意味合いも併せ持ったところにも求められ、それが獅子舞を伝承し続ける原動力になっているということを明らかにした。

主な参考文献

- 赤坂憲雄 2012「震災と文化復興」『第6回無形民俗文化財研究協議会報告書 震災復興と無形文化－現地からの報告と提言－』：67東京文化財研究所
- 荒俣宏(文)・大村次郷(写真) 2000『獅子－王権と魔除けのシンボル－』東京：集英社
- 植木行宣 2000「地域の教育力と民俗芸能－民俗芸能の継承をめぐる－」『民俗芸能研究協議会報告書 第1回復活と継承』東京文化財研究所
- 河合徳江 1995「バリ島の獅子バロン」民族藝術学会『民族藝術vol.11 1995』：67-80大阪：民族藝術学会
- 神田より子・俵木悟編 2010『民俗小事典 神事と芸能』東京：吉川弘文館
- 木村富雄 2013 『ござい～ん!』5月号(牡鹿半島紹介パンフレット)
- 佐伯安一 2002『富山民俗の位相』桂書房
- 笹原亮二 2003『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版
- 高岡市立博物館 2008『常設展ガイドブック』高岡市立博物館
- 高岡市教育委員会生涯学習課内、二上山総合調査研究会 2007『二上山の獅子舞文化』
- 高倉浩樹・滝澤克彦編 2014『無形文化財が被災するということ』東京：神泉社
- 張玉玲 2008『華僑文化の創出とアイデンティティ』愛知：ユニテ
- 田耕旭(チョン・キョンウク)李美江訳 2004「韓国仮面劇－その歴史と原理－」『韓国の学術と文化』18：208-209 東京：法政大学出版社
- 東京文化財研究所 2012,2013『無形民俗文化財研究協議会報告書』独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部
- 富山県教育委員会編 1979『富山県の獅子舞』富山県郷土史会
- 富山県の獅子舞活性化マスタープラン研究委員会(富山県教育委員会文化財課) 2006『富山県の獅子舞芸能と祭礼－獅子の芸能と行事の現状－』
- 古野清人 1968『獅子の民俗－獅子舞と農耕儀礼－』東京：岩崎美術社
- 文化庁監修／日本ナショナルトラスト編 1976『日本民俗芸能事典』第一法規出版
- 文化庁文化財部伝統文化課 2012『無形文化財/民俗文化財/文化財保存技術 指定等一覧』
- 彭偉文 2007「中国における獅子舞の娯楽性について」『季刊東北学第12号特集獅子舞とシシ踊り』：48-65 東北芸術工科大学・東北文化研究センター発行、柏書房
- 星野紘 2009『村の伝統芸能が危ない』東京：岩田書店
- 本田安次 1990『日本の伝統芸能』東京：錦正社
- 宮家準 2002『民俗宗教と日本社会』東京：東京大学出版会
- 柳田國男 1915「獅子舞考」『定本柳田國男集第七巻』：443-453 筑摩書房。

※本論文は2014年度提出修士論文(指導教授謝荔)を大幅に短縮、訂正したもの

(史学専攻修士課程2014年度修了)

The meaning of the transmission of *shishimai* in Japanese communities

HIRASHIMA Akemi

Major in History

Abstract

Shishimai is a traditional performing art employing a lion mask. It is explained as a lion dance because *shishi* means lion and *mai* means dancing. *Shishimai* is one of the biggest and the most enjoyable events in Japanese communities. The performers try to make contact with the supernatural world through dancing rhythmically with the mask on.

Most *shishimai* in Japan are performed at Shinto festivals or on the New Year by people in the community and transmitted among them from elders to younger people, while those in some Asian societies are performed at the opening ceremony of a company or on the Lunar New Year by professional groups and transmitted from master to pupil there.

Shishimai in Japanese communities are a religious symbol for the people there. *Shishimai* give them hope, satisfaction, power to live, identity and good relationship in a community not only in case of peace but also in case of emergency. *Shishimai* show people's decision to form a sense of identity and maintain their community.

(Supervisor: Prof. Hsie Li)